

## 豊予要塞

－忘れられた巨大要塞－

別府大学史学研究会戦史研究室

### I. はじめに

豊予要塞は大分・愛媛の両県から豊後水道を防衛する要として構築され、太平洋側から侵攻しようとする敵艦に向けて攻撃を加え、防衛する役割を担っていた。しかし、要塞として実戦を経験することなく終戦を迎えた。



写真1 佐賀関側より見た佐田岬、高島

本研究室では、設立時から兼ねてより戦いの歴史に関する研究を行うことと併せ、地域に根差した戦史の研究をしたいと考えていた。その中で、大分県南部沿岸から豊後水道を囲むような形で存在した豊予要塞について知り、2014年10月25日から26日にかけて簡単な現地調査を行って見たところ、事前調査していた資料と異なる点が数多く存在していたことや、豊予要塞について扱った資料の少なさから、豊予要塞についての研究や調査はほとんど進んでおらず、不明な点や手つかずの遺物が数多く存在していることが判明した。この事から、豊予要塞についての研究を本研究室の長期的な研究テーマと捉え、その研究の第一段階として、現段階で確認できる限りの関連資料と現地調査で判明している箇所についてまとめ、今後の現地調査に生かしたいと考えた。調査参加者は以下の通り。

別府大学史学研究会学生部会戦史研究室

（平成26年度）史学・文化財学科

四年 久我 一生、松田 亮  
 三年 愛下 歩、河田 正悟、樋口 和紀、樋口 洋之  
 二年 金子 昂平、納戸 翼、吉本 幸樹  
 一年 新谷 拓巳、永田 祥大、福岡 幸博

（平成27年度）史学・文化財学科

四年 愛下 歩、河田 正悟、樋口 和紀、樋口 洋之  
 三年 金子 昂平、納戸 翼、征木 翔平、吉本 幸樹  
 二年 新谷 拓巳、永田 祥大、福岡 幸博  
 一年 神田 敏志、高橋 生壮、鳴本 剛志、貝江 勇紀、村山 浩輔

調査協力

伊方町 町見郷土館 高嶋健二氏

## II. 豊後水道の地理、自然環境と軍事的重要性

豊後水道は、大分県と愛媛県の間に位置する太平洋と瀬戸内海を結ぶ海域である。豊後水道の北の境界は豊予海峡（速吸瀬戸<sup>1</sup>）であり、南の境界は愛媛県高茂岬と大分県鶴御崎を結ぶ線となっている。その規模は東西50km、南北40kmであり、水深は鮪子瀬、水ノ子島<sup>2</sup>、勘兵衛瀬、海瀬瀬などの少数の離陸礁を除けば中央部で80～90m、豊予海峡南東の最深部で300～400mとなっている。豊後水道の両岸は典型的なりアス式海岸となっており、岬や入り江の多い複雑な地形が見られる。水道の東、愛媛県側には日振島、御五神島、戸島が浮かび、西の大分県側には高島、無垢島、保戸島、大入島、大島が点在する。

豊後水道の名称は、水路の測量、海図の刊行などを行う海軍水路局が明治16年（1883年）に海図一五一号（明治15・17年測量）で使用したのが始まりである。これ以前は特に名称等はなかったようで、江戸時代後期の豊後国の地誌『豊後国志』では単に「海」とだけ書かれており、佐賀関から臼杵、佐伯と連ねて各々の海浜の様子を説明しているのみである。

豊後水道の北の入口である豊予海峡は、愛媛県佐田岬半島突端の佐田岬と大分県佐賀関半島の関崎の間の海峡であり、幅は13.5kmである。豊予海峡は潮流が急で岩礁も多い西日本有数の海の難所であり、干満の差によって生ずる潮

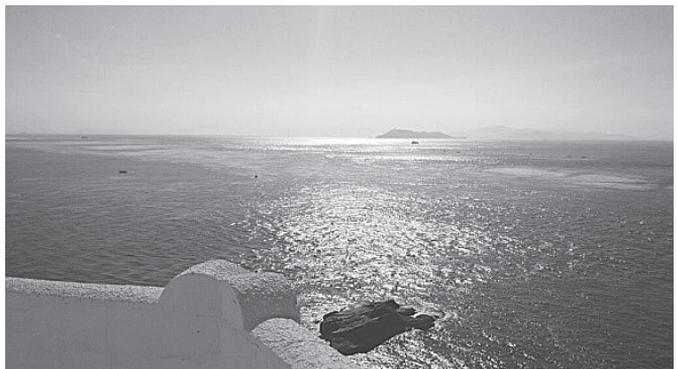


写真2 佐田岬灯台より佐賀関方面

流は最大5.5ノットに達し、これは鳴門海峡に匹敵する。愛媛県側の佐田岬半島は、半島頸部の伊方町から南西に40km伸びた細長い岩石の半島であり、リアス式海岸、潟湖、海食崖など変化に富んだ自然環境が見られる。佐田岬はこの半島の先端部分にあり、中央構造線が豊予海峡に没する地点となっている。岬端には佐田岬灯台が設けられている。大分県側の佐賀関半島は別府湾と臼杵湾を分かち様に伸びる楔形の半島であり、四国北部を東西に走る三波川帯の延長部にあたる。結晶片岩を主とする変成岩からなり、樅木山(484m)を主峰とする山脈が走っている。関崎はこの佐賀関半島の先端に位置し、岬上には関崎灯台が設置されている。

豊後水道の南端を画する鶴御崎は、中生代層の粘板岩からなり、海食崖が発達している。多くの海食洞があり、押し寄せる波が洞内の圧縮された空気て跳ね返り、10mほどに吹き上げる潮吹き現象が見られる。

この豊後水道から別府湾に到る水路は、瀬戸内海に通ずる海の重要幹線であり、軍事的にも重要だった。瀬戸内海を東へ進めば広島県呉市の鎮守府があり、その更に東には阪神工業地帯が控えている。特に水路が狭くなっている豊予海峡の部分は敵艦船の通過を妨害しやすく、戦略上重要な価値を持っていた。

### Ⅲ. 豊予要塞の歴史

大分県と愛媛県に挟まれた豊後水道の中には瀬戸内海の入り口といえる豊予海峡が存在する。豊予海峡は海峡の幅約14kmの狭い水道であり、ここを抜ければ瀬戸内海へと入ることができるため、明治時代から灯台や監視所が造られる等、重要な拠点として整備されてきた。大正8年(1919)に入ると、『要塞整理要領<sup>3</sup>』が裁可され、佐賀関に陸軍築城部本部の支部である築城部豊予支部が発足し豊予要塞の構築が本格化された。

#### (1) 砲台の構築

豊予要塞の目的は、豊予海峡を突破しようとしてくる敵艦隊を食い止めることである。そのため豊予海峡を挟んでいる佐賀関と佐田岬、その中心に浮かぶ高島に砲台が構築された。また、ワシントン海軍軍縮条約によって廃艦となった巡洋戦艦<sup>4</sup>「伊吹」の後部砲塔が鶴御崎半島に据え付けられ、昭和7年(1932)に竣工した。昭和7年(1932)時点で完成している主な砲台と射界は表1、図1のとおりである。

高島第一砲台	斯加式九糎速射加農	4 門
高島第二砲台	七年式三十糎長榴弾砲	4 門
佐田岬第一砲台	七年式十五糎加農	4 門
佐田岬第二砲台	七年式三十糎短榴弾砲	4 門
鶴御崎丹賀砲台	砲塔四十五口径三十糎加農	2 門

表1 昭和7年時点の砲台配置 (独立混成第118旅団歴史より)



図1 昭和7年時点の射界

図1のように豊予要塞の各砲台は豊予海峡の全てと豊後水道のほとんどをその射程範囲内に収めていたことがわかる。陸上砲台は海の上で揺れ動く艦艇の物と比べ命中精度が優れており、もし敵艦艇が海峡を突破しようとするれば豊予要塞は大きな脅威になったと思われる。特に丹賀砲台の砲塔四十五口径三十糎加農は射程・威力共に最大の火砲であり、豊予要塞の主砲としての役割を期待されていた。

## (2) 戦争の激化と豊予要塞の縮小

このように強力な要塞として完成した豊予要塞だが、昭和14年（1939）に高島第二砲台の七年式三十糎長榴弾砲と佐田岬第二砲台の七年式三十糎短榴弾砲の計8門が移動砲床を用いることができるように改修を加えられたのちに撤去され、満州へと送られた。送られた砲はおそらくソ連国境に構築された要塞の備砲となったと思われる。また、昭和17年（1942）1月には射撃試験中の砲塔四十五口径三十糎加農が砲腔爆発を起こし、死傷者56名を出す大事故となった。砲台の跡には、後に七年式十五糎加農4門が配備され、鶴御崎第一砲台が新たに構築された。さらに、昭和19年（1944）10月には佐田岬第一砲台の七年式十五糎加農4門が鹿児島の内之浦臨時要塞に転用された。昭和20年（1945）時点での主な砲台と射界は表2、図2のとおりである。

高島第一砲台	斯加式九糎速射加農	2門
高島第二砲台	三八式野砲	2門
高島第三砲台	斯加式十二糎速射加農	4門
佐田岬新砲台	三八式十二糎榴弾砲	4門
鶴御崎第一砲台	七年式十五糎加農	4門

表2 昭和20年時点の砲台配置（独立混成第118旅団歴史より）



図2 昭和20年時点の射界

高島・佐田岬第二砲台、佐田岬第一砲台の撤去と丹賀砲台の損失によって豊予要塞はその能力を大きく削がれることとなった。その結果、射程もかろうじて海峡をカバーできる程度のもとなっていた (図2 参照)。また、太平洋戦争中に豊予海峡に侵入する敵は水上艦艇ではなく潜水艦や航空機であったため、豊予要塞は応戦することができず、終戦を迎えることになる。ここからは各砲台の概要を述べていく。

### (3) 佐田岬砲台概要

佐田岬砲台は敵艦が豊後水道から瀬戸内海に侵入するのを防ぎ豊後水道に面する九州、四国地方を防衛するために設置された豊予要塞の砲台の一つとして佐田岬に設置された砲台である。佐田岬は愛媛県の最西端に位置し、豊後水道の東側の防衛と沖ノ島砲台付近までの広範囲の防衛を担当した。

豊予要塞計画第一期工事の一つとして大正13年(1924)9月28日三崎村にある灯台の北東約200mに第一砲台が起工し昭和元年(1926)1月に竣工した。竣工から3年を経て昭和3年(1929)4月4日第二砲台において七年式三十糎短榴弾砲の砲床抗堪試験射撃<sup>5</sup>を実施した。

日中戦争が勃発すると昭和14年(1939)夏に第二砲台の七年式三十糎短榴弾砲と七年式三十糎長榴弾砲の計8門が外地に転用され、その代用として昭和15年(1940)春に第一砲台に七年式十五糎加農4門、第二砲台に三八式野砲2門の配備が決定された。

日米開戦の気運が高まると昭和16年(1941)11月17日に重砲兵一個中隊<sup>6</sup>約百二十人が下関要塞から派遣され、うち一個小隊数十人は11月20日に配備され、さらに12月末には要塞重砲兵連隊の第五中隊が増強配備されたが、翌昭和17年(1942)には太平洋戦域の戦況に伴い第二砲台が廃止された。その後、昭和19年(1944)7月15日に戦時警備令<sup>7</sup>が発令され、10月には七年式十五糎加農4門が鹿児島県内之浦臨時要塞に転用のために撤去され、昭和20年(1945)3月には鶴御崎砲台に配備さ

れていた第二中隊の三八式十二糎榴弾砲4門が佐田岬砲台に変更配備される等戦力が縮小された。

一方で昭和20年（1945）に佐田岬の灯台下の御籠島（大島）<sup>みかごしま</sup>に新たな砲台を建設している。この砲台の建設中に事故が発生し、3人の兵士が事故死した。同年7月1日以降、長野師団管区において編成された編合部隊が到着し、独立歩兵第716大隊が佐田岬地区に配備された。しかし、昭和20年（1945）8月15日に終戦となり、敵艦を一度も撃つことなく終戦を迎え、砲台としての役割を終えた。なお、武装解除や解体作業が行われたが、砲床や弾薬庫跡は今も残存している。しかし、経年劣化のため保存状態があまりよくない。

（独立混成第118旅団歴史より）



図3 昭和13年時点の佐田岬砲台の配置

#### IV. 現地調査

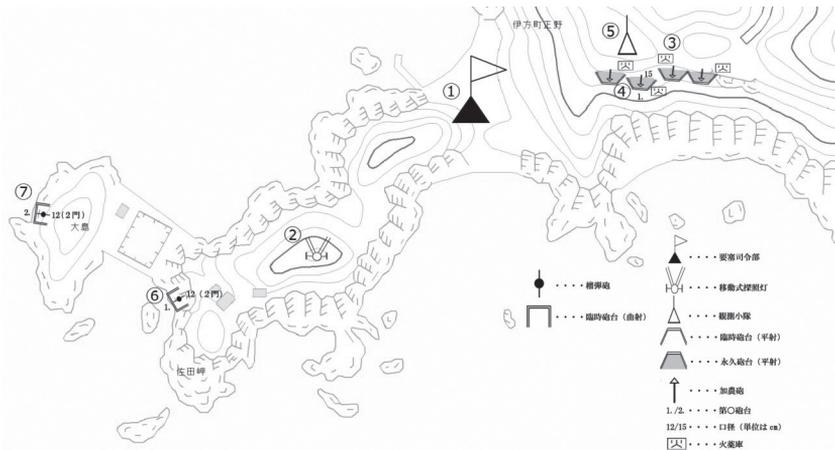


図4 佐田岬第1砲台地図

### ・佐田岬第一砲台周辺地

愛媛県教育委員会の『愛媛県の近代化遺産－近代化愛媛歴史遺産総合調査報告書－』によると、現在のキャンプ場管理所の位置がかつての佐田岬砲台司令部及び発電所があったと考えられる。写真3を一見してもそのような軍事施設の遺構等は確認できないが、通常のキャンプ場にこのような山へ埋め込んだ状態の管理施設があることは少なく、施工費用や運営の面から見てもキャンプ場管理施設としての目的からこの建物が建設されたとは考えにくい。そのため司令部跡であると言えるだろう。

また、爆撃や砲弾の着弾に耐えやすいよう山腹に埋め込み、敵艦隊から砲撃されにくい位置に立地している

ことなど、軍事施設として建造されたとしか考えられない構造となっている。そのことから、残されていた旧軍の施設をそのまま流用したと考えるのが自然である。

以上のことから、ここが司令部もしくは砲台関連官舎であると考えられる。現在はキャンプ場管理所という都合上壁面は白色に塗られているが、かつては後述の第二砲台砲床や弾薬庫壁面のような迷彩塗装が施されていたと推定され、近隣にある第一砲台観測所の壁面には実際に同じパターンの迷彩塗装の痕跡が確認できたため、こちらの施設にもそれが施されていた可能性は十分に高いだろう。

### ・照空灯格納庫

現在、照空灯格納庫は遊歩道に面しており、非常に見学しやすい状態となっている(写真5参照)。

照空灯は「トキメック社史」(旧東京計器)によると九四型可搬式百五十糎照空燈、百十糎照空燈が要地防衛用に用いられており、豊予要塞にも配備されていたと考えられる



写真3 司令部跡-①



写真4 井戸跡



写真5 照空灯格納庫-②

（探照灯とも呼称されるが、ここでは便宜上陸軍の呼称である照空灯と記述する）。これらの照空灯はその名の通り可搬式となっており移動にはレールを用いていた。そのため、椿山をぐるりと囲うようにレールが敷かれ、照空灯はそれに沿って周回させることで伊予灘と豊後水道の両方を照らすことができるようになっていた。現在、そのレールは撤去され、敷設されていた道は遊歩道となっており、痕跡を確認することはできない。また、隣の炭素棒保管庫にはかつて、照空灯のフィラメント的役割である炭素棒が格納されていた（写真6参照）。



写真6 炭素棒保管庫

照空灯はアーク灯の原理で発光するため炭素棒の寿命は非常に短く、この照空灯の場合炭素棒一本の連続使用は30分程度が限界であった。そのため、照空灯格納庫の隣にはこのような炭素棒保管庫が設けられる事例が多い。また、この保管庫の入り口には蝶番の痕があり、扉があったことが伺える。（※内部の高さは4 m弱）

照空灯はアーク灯の原理で発光するため炭素棒の寿命は非常に短く、この照空灯の場合炭素棒一本の連続使用は30分程度が限界であった。そのため、照空灯格納庫の隣にはこのような炭素棒保管庫が設けられる事例が多い。また、この保管庫の入り口には蝶番の痕があり、扉があったことが伺える。（※内部の高さは4 m弱）

#### ・弾薬庫

弾薬庫は佐田岬第一砲台周辺地図で示した通り各所に点在しており、その多くは塹壕などで砲座に接続されている。距離的には平均5～6 m程度に設置され、弾薬庫から出した砲弾を即座に砲座へ供給できるようになっていたと考えられる。縦坑壁面に梯子の支柱の跡らしき鉄片が残っていることから、かつてここに梯子が設置されていたと考えられ、ここが弾薬庫の搬入口兼入り口として機能していたと推測できる。



写真7 縦坑とクレーン跡-③

ほとんどの縦坑は写真8のように内部に地下水が溜まっており、その水位から推測するに、弾薬庫もまたその半分が水没していると考えられ



写真8 縦坑内部

る。

いくつかの縦坑の地上入口の隣には写真 7 のように弾薬揚弾用クレーンの支柱跡が残っている。これは 1 m 前後のコンクリート製で、ワイヤー巻き上げには人力もしくは手動ウィンチが用いられていたと考えられるが、現在は先端部がひどく損傷している為クレーンの形状がどのようなものであったかは推測ができない状態となっている。損傷の原因としては人為的な破壊が考えられ、日本軍もしくは進駐軍によって破壊されたものと考えられる。

砲床部近辺には写真 9 のような揚弾坑<sup>8</sup>が各所にあり、周辺区域の地下には弾薬庫と砲弾搬入口、



写真9 揚弾坑



写真10 揚弾坑内

揚弾坑をつなぐ広大な地下壕の網が広がっていると考えられる。

被弾・誘爆した際の被害軽減のため弾薬庫と揚弾坑はかなり離して設置される傾向が強いことから、その規模は地表に点在する遺構からのみでは推測が難しく、改めて内部調査行っていきたいと感じている。

### ・砲床

砲床は 4～5 箇所存在を確認でき、そのすべてが伊予灘を見下ろせる南側の斜面に集中している。現在ほどの砲床にも落ち葉が堆積している状態であるため、砲を据え付けていた跡や砲床等は確認ができない (写真 11・12 参照)。

いくつかの資料を照らし合わせて見たところ、この砲床部分は時代によって据え付けられていた砲が変化していることがわかり、砲床の状態を確かめ、資料との比較検証を行えば、最後に据えら



写真11 砲床と思われる穴



写真12 真上から見た砲床

れていた砲の種類までは推測できるだろうと考えている。

### ・観測所

歴史群像編集部『日本の要塞』の八八式海岸射撃具<sup>9</sup>想像図と類似するため、この建築物は観測所と思われる（写真13参照）。この場所は遊歩道から旧軍が設置したと考えられる細い道を上っていった所にあり、観測所前面部分は竹やぶに覆われている状態で確認することはできない。

外部の壁面には迷彩の痕跡は確認できるものの、ほぼ消えている状態となっている（写真13参照）。内部は床板の木材が瓦礫のように散乱している状態となっており、かつてあった机も破損している。

室内には写真14のようなコンクリート製台座跡が確認でき、かつてはここに八八式海岸射撃具のような射撃盤<sup>10</sup>もしくは測距儀<sup>11</sup>が設置されていたものと推測できる。

同じ観測所でも、第二砲台観測所とこちらの跡では形状が大きく異なっており、運用している砲や戦術面での役割分担などから、観測所内設備等に差異が発生していると見られる。

### ・退避壕

遊歩道を少し下ったところに、退避壕と思われる洞穴があり（写真15参照）、奥行きは5～6mほどとなっている。地面にはかなり岩が散乱しており、内部は大人一人がやっと通れる程度の広さ



写真13 観測所入り口-⑤



写真14 射撃盤もしくは測距儀台座



写真15 退避壕入り口



写真16 退避壕内部

となっていた (写真16参照)。当初は愛媛各地域に存在する農業用水路かと考えたが、先が行き止まりとなっており、また入ってから 2 m ほどのところに横道が掘られていた。これに加え、入り口は奥へ行くほど昇り勾配となっており、水を流すには不適切であることから用水路という可能性は薄く退避壕と推定した。

### ・新砲台

新砲台は昭和20年 (1945) 頃に構築されたもので、三八式十二糎榴弾砲が設置されていたと推測される。灯台直下に 2 箇所 (写真17参照)、御籠島に 2 箇所設営されており (写真18参照)、それぞれに連絡通路や即応弾を保管する弾薬庫が設置されていたと思われるが、その入り口等は確認することができなかった。おそらく周辺のどこかに必ずあるはずなので、引き続き調査を続けていきたいと考えている。



写真17 灯台直下砲台-⑥



写真18 御籠島-⑦



図5 佐田岬第二砲台地図

## ・第二砲台砲床

第二砲台は県道256号線沿いの険しい斜面を下った麓の位置に存在しており、到達が困難であった。その後、周辺を探索したところ軍用栈橋に繋がる道を発見し、こちらの方は石畳と思われる舗装が行われており旧軍が運搬用道路として整備したものと考えられる。この道も現在は土や草で埋もれて見えにくい状態となっており、より見学がしやすいよう整備が必要な箇所であると言える。



写真19 七年式三十糎短榴弾砲 砲床－⑧

この砲床は直径3mで、弾薬庫を1つずつ挟んで4つ設置してある。3mという砲床の大きさから、おそらくここには七年式三十糎榴弾砲が設置されていたのではないかと考え



写真20 貯水に用いられた砲床－⑧

られる。佐山二郎氏の『日本陸軍の火砲機関砲 要塞砲続』によれば、この砲は大正7年（1918）に制定されたもので、400kgの砲弾を12000m先まで届かせる能力を持っていた。

また、65度の仰角で山なりに射撃ができたので、佐田岬の尾根を越えて豊後水道側に砲撃できる他、水平射撃も可能だった。そのため、第二砲台は立地等から考えると豊後水道を北上する敵艦隊を高島砲台と協同して攻撃し、撃ち漏らした敵艦が豊予海峡を通過して芸予海峡に入るまでに殲滅することを目的として設置されたものと考えられる。

現在、4つの砲床のうち3ヶ所は写真20のように水が溜まっており、底が見えるのは1ヶ所のみだった。3ヶ所に水が溜まっているのは戦後農業用貯水池として用いられた為だとする資料が多かったが、現在も使用されているかはわからなかった為、次回の調査で近隣の住民の方々へ聞き取り調査を行う予定である。

## ・弾薬庫

砲床から5m程度の場所に、砲床の間に挟まるような形で弾薬庫が3箇所設置されている。

弾薬庫は斜面の一部を掘った半地下弾薬庫となるように作られ、弾薬庫は入口から見て奥行きは4mほどで、大人10人が余裕で入れる程度の広さを持っていた（写真21参照）。半地下方式を採用した理由としては、七年式三十糎短榴弾砲射撃の際の爆風から弾薬庫を守る他、弾薬庫の位置を隠

蔽して敵から攻撃されるのを防ぎ、また退避壕としての側面も持つなどの事からこのような形式になったと推測できる。

弾薬庫は写真22のように非常に綺麗な状態で保存されており、多少の土砂の流入や子供が描いたと思われる落書き等を除けば完全な状態で残っている。以前は扉が存在していたと見られる蝶番の痕跡等が見受けられるが、現在は撤去されている。砲床部を取り巻く 1 m 程の高さの壁には、迷彩が弾薬庫の入口の直前まで施されている。迷彩は写真21のように脱色・劣化が少なく鮮やかな状態のままで残っており、周囲の木々によって太陽光から保護されていたことがこの状態を保つ要因になったと考えられる。



写真21 弾薬庫入り口-⑨



写真22 弾薬庫内部-⑨

豊予要塞全体で見ても、これほど鮮やかに迷彩が残っている事例は少なく、他の遺構に施されていた迷彩等の復元に際して大きな参考材料になると期待できる。ただし、このまま保存処理をせずに放っておけば当然ながら劣化が進行するので、早急な保存処理が望まれる。

### ・ 軍用栈橋

この栈橋は第二砲台へ資材を搬入するために作られたと思われる。佐田岬砲台関連施設の中で唯一「旧正野谷栈橋」として国の登録有形文化財の指定を受けている。長さ約50m、幅約5mであり、砲台建設資材の陸揚げに使用される目的で建設された他、砲台で使用される弾薬や物資の搬入、人員の陸揚げ等にも使用されている。栈橋周辺の水深は浅いため、大型艦ではなく小型船舶で接岸・物資搬入をしていたと考えられる。栈橋に4箇所長方形の穴が開いているが(写真23参照)、これは波圧防止のためであり、この穴から波を噴出させて栈橋に強い負荷をかけないように設けられている。

第二砲台の途中までは道がコンクリートで舗装されていたが、その途中にある砲床へと続く道には舗装されているような痕跡は確認できなかった。しかし、堆積している落ち葉のところどころに平たい石が複数確認できた為、石畳によって舗装されていたものと考えられる。また周辺にコンク

リートでできた建物の基礎が存在していることから、兵舎もしくは軍関連の官舎が存在していたと思われるが、戦後人為的もしくは自然災害によって壊されたものと思われる。



写真23 軍用栈橋 上面-⑩



写真24 軍用栈橋-⑩

## V. おわりに

豊予要塞関連遺構群の保存整備・活用について、真剣に考えなければならない時期がきている。

規模・防衛範囲において国内最大規模を誇り、まだ保存状態が良好な遺構が未だ数多く残っている為に、それらから読み取れる情報もまだ数多く存在している事は明らかである。

今回、文献資料を用いての研究も行ったが、陸海軍の軍用文書に関しては戦後処理の際に破棄・隠蔽されたものも多く空白が存在していると考えられ、得られた情報量は決して多くはなかった。そのため、遺跡・遺構調査による歴史情報の精査が必要不可欠であった。これを考えると、豊予要塞遺構群の持つ歴史的価値というのはかなり大きなものである。

しかし、その豊予要塞遺構群に危惧すべき事態が発生している。貧弱な箇所や立地の関係上から損傷・劣化が著しい箇所が多くあり、老朽化とも相まって遺構が危機に晒されている状態となっている。

これらの点から、豊予要塞関連遺構群の歴史情報を先達からしっかりと引き継いでいくためにも、今後数年での保存整備や活用に関する動きが大変重要なものになると考えられ、私たちが主体的に動かなければならないということを認識させられることとなった。

最後になるが、今回の調査では機材不足やわずか一日という日程、少ない人員での調査となってしまったことで、得られた情報も少なく悔いの残る結果となった。その為、再調査を企画し、より多くの成果をあげられるよう、今回の調査の反省点を踏まえ準備していきたいと考えている。また、豊予要塞そのものの全国的な知名度は低く、要塞に至るまで道のりに標識等の設置が無いなど、要塞施設見学のための整備は殆ど行われていない。また、保存意識が薄く、遺構の多くも野晒しにされ、周辺整備等は行われていなかった。だが、一部の史跡は周囲の恵まれた自然環境により劣化の進行が遅く比較的良好的な保存状態であり、近代日本の軍事史跡の様相が非常によく見て取れる。このような貴重な要塞遺構の活用および保存を強く求めていくと共に、全国的な知名度の向上に努めていくべきである。

- 1 速吸瀬戸 (はやすいのせと) …豊後水道北端の境界である豊予海峡の別称
  - 2 水ノ子島 (みずのこじま) …水ノ子島灯台が設置されている孤岩。豊後水道のほぼ中央に位置しており、離陸礁である。明治36年に現在の灯台が設置され、現在も、保存灯台として管理されている。
  - 3 要塞整理要領 (ようさいせいりようりょう) …日露戦争の終了と共に、この間の戦術の進歩などを考慮して、国内の要塞の改廃を含めた全面的な見直し論が浮上してきた。明治42 (1909) 年、参謀本部は「要塞整理要領案」を策定し、翌43年より要塞整理案審査委員会を置いて、そこで審議することとなった。そして参謀本部は大正 6 年、要塞再整理案を作成し、要塞再整理案審査委員会の審議を経て、同 8 年 5 月、「要塞整理要領」を決定した。
  - 4 巡洋戦艦 (じゅんようせんかん) …戦艦並みの高火力と巡洋艦の高速力を兼ね備えた軍艦のこと。ただし、速力を上げるため、装甲が薄くなっていることが短所。当初は「一等巡洋艦」に含まれていたが、1912年 8 月にイギリスに倣って「巡洋戦艦」と類別した。
  - 5 砲床抗堪試験射撃…新しい大砲を開発した際や新しく既存の大砲を使用する際、その砲を砲床に据えたときに一定量の砲弾を使用して砲撃し、砲床が耐えることが出来るかを調べる射撃試験である。
  - 6 大隊・中隊・小隊…大隊は 3～4 つの中隊と大隊本部・補給部隊・支援部隊などから編成され、戦術単位と呼ばれ独立して 1 つの戦術任務を任される。中隊は小隊より大きく大隊より小さい軍隊の編成単位である。指揮班と 4 つの小隊・支援部隊から編成される。小隊は分隊より大きく中隊より小さい軍隊の編成単位である。3～4 つの分隊から編成される。
  - 7 戦時警備令…兵力をもって重要物件等を警備し、治安の維持をはかること。
  - 8 揚弾坑 (ようだんこう) …弾薬庫から砲弾を砲側まで運搬する装置。なお、縦坑はこれよりも幅が広く人の出入りがあったと思われる。
  - 9 八八式海岸射撃具…海岸射撃具は要塞砲の命中精度を上げる為に考案され、明治43年 (1910年) から開発が始められた。八八式は昭和 3 年 (1928年) に三浦半島で行われた大演習で総合試験を行い仮制式されたもの。主に主測遠機、分測遠機、電気算定具、砲塔電気照準具から構成されている。
  - 10 射撃盤 (しゃげきばん) …動いている射撃目標の角度、方向、距離から現在位置を求め、未来位置の各値を算出するため用いられた一種の計算器。
  - 11 測距儀 (そっきよぎ) …左右に離れた 2 個の対物レンズで取り込んだ画像を、距離計と連動して回転する鏡によって、合成プリズム (ガラスなどの透明体の三角柱) に送る。接眼レンズから覗いた左右の画像を重ね合わせて、距離を測定する機器。
-

# 付録 豊予要塞 組織図

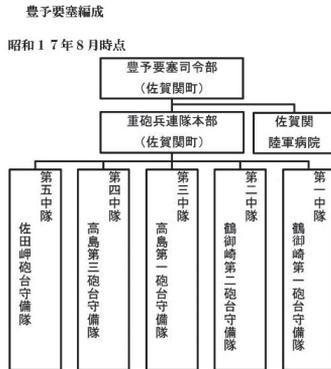


図6 豊予要塞編成 昭和17年1月8日時点

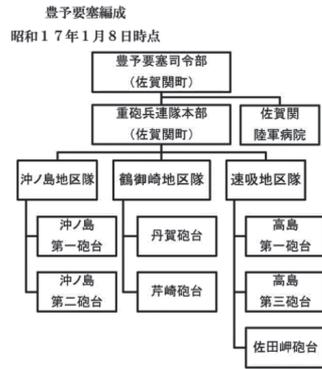


図7 豊予要塞編成 昭和17年8月時点

独立混成第一百八旅団編成  
昭和20年6月時点

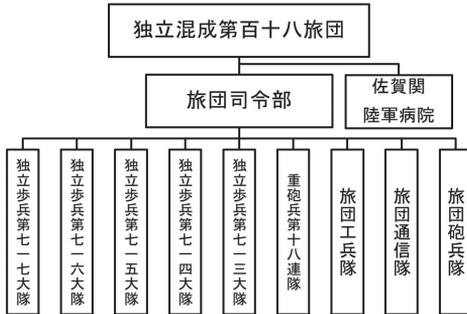


図8 独立混成第一百八旅団編成 昭和20年6月時点

## 付録 豊予要塞年表

年 月 日	世界	豊予要塞
明治18年 (1885)	6月、清とフランスの間で天津条約が締結される	陸軍参謀本部が『豊予海峡防禦要領』を作成
明治27年 (1894)	7月、日清戦争が始まる	鶴御崎に海軍望楼が設置される
明治34年 (1901)	9月、北京議定書が調印される	水の子島灯台が着工される
明治35年 (1902)	1月、日英同盟が調印される	水の子島灯台が竣工点灯
明治36年 (1903)	7月、ロシアが東清鉄道を全線開通させる	レンガ造り平屋建ての史員退息所が建てられる
大正8年 (1919)	1月、パリ講和会議が開催される 6月、ドイツが連合国とヴェルサイユ条約を締結する	『要塞整理要領』が裁可され、佐賀関に広島陸軍築城部本部の支部として築城部豊予支部が発足する
大正10年 (1921)	12月、ワシントン会議で4カ国条約が調印され、日英同盟が破棄される	7月、高島第一、第二砲台が起工する
大正13年 (1924)	4月、イタリア総選挙でファシスト党が勝利する	1月、『要塞再整理要領』が制定される 高島第一、第二砲台が竣工する
大正15年 (1926)	7月、蒋介石が北伐を開始	豊予要塞司令部が佐賀関古宮に置かれ、兵備として豊予要塞重砲兵連隊が配備される
昭和2年 (1927)	4月、徴兵令が廃止され、兵役法が公布される 6月、ジュネーブ海軍軍縮条約が開始される	4月、築城部豊予支部が佐伯に移転する 8月、巡洋戦艦「伊吹」の砲塔を装備した丹賀砲台が起工する
昭和6年 (1931)	9月、満州事変勃発	9月、丹賀砲台が竣工し、豊予要塞重砲兵連隊第一中隊が軽微のために配属される また、付属施設として八八式海岸射撃員観測所が設置される
昭和8年 (1933)	1月、ヒトラーが首相に就任しナチスが政権を獲得する	10月、高島第三砲台備砲工事着工
昭和9年 (1934)	1月、ドイツ・ポーランド不可侵条約が締結される	2月、高島第三砲台竣工
昭和14年 (1939)	9月1日、ドイツのポーランド侵攻 第二次世界大戦が始まる	高島第二砲台の七年式三十糎榴弾砲及び佐田岬第二砲台の短榴弾砲が撤去され満州へと送られる
昭和16年 (1941)	12月8日、日本が真珠湾を奇襲攻撃し太平洋戦争が勃発する	12月20日豊予要塞に戦時編成が命じられ、佐賀関に豊予要塞重砲兵連隊が編成される
昭和17年 (1942)	6月7日、日本海軍がミッドウェー海戦で敗北する	1月11日、丹賀砲台が試験射撃中に右砲が砲腔爆発を起こし多数の死傷者が発生 以後三十糎砲塔は使用不能になる 3月、七年式十五糎加農が4門配備され鶴御崎第一砲台と命名される 8月ごろ、三八式十二糎榴弾砲4門が配備され、鶴御崎第二砲台と命名される

昭和19年（1944）	7月、サイパン島が陥落する 11月、サイパン基地のB-29が東京を初空襲	10月、佐田岬第一砲台の七年式十五糎加農 4門が鹿児島の内之浦臨時要塞に転用され る
昭和20年（1945）	8月6日、広島に原爆が投下される 8月9日、長崎に原爆が投下される 8月15日、日本がポツダム宣言を受諾し連 合軍に対して降伏する	2月、豊予要塞が第十六方面軍の管下に編 入される 3月、鶴御崎第二砲台の備砲が佐田岬新砲 台に移転される 4月、豊予要塞守備隊が編成される 5月、豊予要塞重砲兵連隊が重砲兵第十八 連隊に改編され、独立混成第百十八旅団に 編合される

## 参考文献

- 愛媛県教育委員会編 「陸軍豊予要塞佐田岬砲台」2013年11月30日
- 愛媛県教育委員会編 『愛媛県の近代化遺産 - 近代化えひめ歴史遺産総合調査報告書』 p.278.
- 芥川龍男著 『戦国史叢書 9 豊後大友氏』1972年発行
- 相賀徹夫（編集）『万有百科大事典 7 日本地理あーそ』小学館 1972年
- 相賀徹夫（編集）『万有百科大事典 8 日本地理たーわ』小学館 1974年
- 秋庭 隆（編集）『日本地名大百科 ランド ジャポニカ』小学館 1996年
- 大分県立先哲史料館 『大友水軍～海からみた中世豊後～』2003年
- 加藤知弘 『解説大分の歴史史料集』1975年 大分大学教育学部 歴史教育研究会
- 『豊後水道域 - 自然・社会・教育 -』1980年 大分大学教育学部
- 神崎信博著 『大友水軍の雄 一尺屋若林氏』2011年
- 神戸輝夫編 『おおいの戦争遺跡』2005年 大分県文化財保存協議会
- 国史大辞典編集委員会（編集）『国史大辞典 第八巻』1987年 吉川弘文館
- 佐山二郎著 『日本陸軍の火砲 要塞砲』2011年 光人社
- 佐山二郎著 『日本陸軍の火砲 機関砲 要塞砲続』2011年 光人社
- 下中邦彦（編集）『日本歴史地名大系第三九巻 愛媛県の地名』1980年 平凡社
- 辻 正道編 『図説 海部・大野・竹田の歴史』2007年 郷土出版社
- フランク・B・ギブニー（編集）『ブリタニカ国際百科事典 5』1974年 ティビーエス・ブリタニカ
- 平凡社地方資料センター（編集）『日本歴史地名大系第四五巻 大分県の地名』1995年 平凡社
- 「戦跡 豊予要塞の実像を探る」『別府史談（23）』p.87-93, 2010年 別府史談会
- 歴史群像編集部『日本の航空母艦パーフェクトガイド』2003年 学習研究社
- 歴史群像編集部『日本の要塞』2003年 学習研究社
- 渡辺澄夫著 『豊後大友氏の研究』1982年 第一法規出版
- 渡辺澄夫著 『大分県の歴史』1971年 山川出版社

参考URL

いよ観ネット「旧正野棧橋」[http://iyokanet.jp/front/spot/detail/place\\_id/1758/](http://iyokanet.jp/front/spot/detail/place_id/1758/) 2014年

アジア歴史資料センターより引用

標題：御署名原本・昭和七年・勅令第一七八号・築城部条例ヲ改正シ陸軍築城部令ト改題

〔JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.A03021853400

標題：兵器増加補給の件

〔JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C01000075600

標題：築城部支部位置及等級改正の件

〔JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C01000964300

標題：豊予要塞備砲工事实施の件

〔JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C01000964300

標題：豊豫要塞鶴見崎砲臺鎮海湾要塞張子嶮砲台砲塔据付完了後に於ける試験射撃に関する件

〔JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C01003916100

標題：豊豫要塞鶴見崎砲台建築工事完成の件

〔JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C01003948600

標題：豊豫要塞高島第 3 砲台備砲工事实施の件

〔JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C01003975600

標題：砲塔45口径30糧加農改修の件

〔JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C01004232400

標題：豊予要塞備付要塞司令部保管仮兵器表改正の件

〔JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C01005379900

標題：豊予要塞備付要塞司令部保管仮兵器表改正の件

〔JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C01005379900

標題：昭和11年度要塞所要（増加配属）兵器整備計画に関する件

〔JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C01005449600

標題：豊豫要塞地帯変更に関する件

〔JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C01007468700

標題：兵器改修の件

〔JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C01007479800

標題：津軽要塞汐首崎第一砲台及豊予要塞高島第二砲台撤去に関する件

〔JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C01007735700

標題：工事着手の件

〔JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C03022660800

標題：要塞再整理第1期備砲著手順序に関する件

〔JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C03022702500

標題：佐田・備砲工事実施の件

〔JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C03022702800

標題：豊予要塞備附要塞司令部保管仮兵器表規定の件

〔JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C03022754800

標題：要塞重砲兵連隊・要塞砲兵隊

〔JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C12121120900

標題：46. 昭和19年度整備品目員数調

〔JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C12121790500

標題：要塞

〔JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C14010643700

標題：独立混成第118旅団歴史

〔JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C14060991400